Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。前号からは大型コーナースピーカーを連続してご紹介する。前号でのJBLの初期型パーツフィールドに続き、今号

本文／田中伊佐資
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林鮮彦（彩紅舎）

P.30参照

TANNOY

タンノイ社1926年頃にガイ R・ファウンテンによって英国ロンドンに設立される。当初は電解整流器を生産する会社だったが、1993年頃からスピーカ専門メーカーへと変貌していく。1947年にはタンノイ同軸ユニットの第1号機となるモデルBlack が開発され、その後 Silver、Red、Gold、HPD と録音技術の変化と共にモデルチェンジが行われる。フラッグシップモデルである大型のスピーカーAutographやGRF は1980年代に入ると、時代のニーズに伴い、メーカーは生産を中止するが、特に

英国オリジナルAutograph／Gold-15inch

1953年に大型モノラルスピーカーシステムとして英国で生産されたモニターシルバーが搭載された Autograph 1号機は、その後もモニターレッドを経てステレオ時代になって開発されるモニターゴールドまで英国でのみ生産された。キャビネットは同じサイズ、構造を継承しながら、ユニットだけが入れ替わっていく。各時代のユニットごとにネットワークとウーファーコーン紙が新たに開発され、中音域の音色と低音域の量感の表情に変化があり、マニアによってどの年代のユニットを搭載する Autographかで好みが分かれている。客観的な感想ではシリーズの中で最もコーン紙が薄いシルバーは厚みはあるが、とても軽くハイスピードな低音、レッドは弦楽器からピアノまでそつなくこなす優等生なオールマイティタイプ、ゴールドタイプは滑らかな弦楽器の響きと壮大なオーケストラサウンドを奏でる。

キャビネット後面。今回の Autograph は初期型の Gold-15 inch モデルのため、ターミナルがアッテネータと一体になっておらず、キャビネット後面下のハカマ部分にスピーカーターミナルが設けられている。後面の仕上げはほとんど素地のままのような感じで、ほんの少しだけクリアが塗られている

キャビネットの正面。本体は全て12mm板厚のベニア材で構造されており、見た目の大きさとは違いあまり重量がない。特に英国 オリジナル Autograph は良く低音が出て響きが良いのが評判だが、この軽く良く共鳴するキャビネットがその秘密となっている

心任せに音楽だけに浸れる世界はオーディオの終着駅かもしれない

前々回から始まった大型スピーカー・シリーズは続く。

このたびはいよいよその最右翼、タンノイ・オートグラフの登場だ。シリーズと銘打つ以上、これが出てこないと話が始まらない。

目の前にあるオートグラフは、ユニットはモニターゴールドなので、1960年代後半に製造されたものだ。岡田さんの説明によれば、フランスにある誰かの豪邸にひっそりと眠っていたらしく10年に1度の上物とか。確かにサランネットやエンクロージャーに傷や汚れ、日焼けした跡などがない。

外見的なこと以上に、骨董の世界にも通じた高級な品格を発散していることが印象深い。歳月は気品を醸成させるのだろうか。良質なヴィンテージ機器に接するたびにそんなことを思う。どうにも不思議で仕方がない。

岡田さんが「田中さん、軽く持ち上げてみてください」と言う。こんな大きいもの無理でしょと思いつつも、手を掛けて力を入れてみると思わず「あっ」と声を出してしまった。見かけとは裏腹に思いのほか軽いのだ。

「木がパリパリに枯れているんですね。補強材も入っていませんしね」

もちろんこのことは音質面で大きな作用をもたらしている。

マイルス・デイヴィスの「フォア&モア」は、トニー・ウィリアムスの鋭角的なシンバルに煽られて、バンド全員のアグレッシブな演奏が聴きどころ。これをオートグラフで聴くとどう出るか。ここから始めてみることにした。

演奏の熱気はそのままだが、高いテンションで前に突っ込んでくるのではなく、1歩引いた包容力がある音。いつもシンバルばっかりに耳が引っ張られていたが、トランペットの艶やかな輝きに余裕がある。やはりすべての響きがウッディ。JBLのようなメタリック感はない。

次にドリス・デイの「デイ・イン・ハイウッド」で声の質感を味わう。これは甘美。ひたすらキュート。ドリスは聴き手を包み込むようにやさしく歌う。これは至福の歌声です。

そしてやはりタンノイとくれば、クラシックだ。カール・ベーム指揮、ベルリン・フィルで『モーツァルト／交響曲第35番ハフナー』を聴く。想像通りシンフォニーはストレートにはまった。さすがは銘機オートグラフ、この重厚感は他には得がたいと思う。エンクロージャーの豪壮的な響きは唯一無二だ。

同じくベームで、ウィーンフィルのモーツァルト第40番。これもいい。情報量とか解像度とかオーディオ的な意識は遠のき、心任せにこの演奏、この音に浸っていたいと思う。オーディオのことに微塵も気を遣わずにすむオーディオ、それこそがオーディオの終着駅。なのかもしれない。

アッテネーターと当時の製品タグ。ゴールドタイプからROLL-OFFとENERGY の2個の高域アッテネーターが付く。紙製のタグには Autograph と表記されていて、ユニットの番号も記載されている

スピーカーターミナル。ケーブルをプラスチックの上に赤いた四角い穴に差し込み正面の丸い穴からマイナスドライバーで締めて固定する仕組み

エンブレムとサランネット。真鍮製の板に Autograph と筆文字で書かれている。サランネットは特注のナイロン製で霜降りのように見える、生産されてから50年近くなるため、とても破れやすくなっており、2個のスピーカーのサランネットが共にコンデション良く現存しているのはとても珍しい